

ケニアの野生動物写真展の意義

NPO 法人 ワイルドライフ 代表

菊池 徹

ここ数年、野生動物の保護を掲げる団体が増えている。にもかかわらず、ケニアの保護区で野生動物の個体数が急速に減少しているし、ケニア政府が実施している保護政策に疑問が呈されているという。なんと、保護区内外共に、この30年で個体数40%が減少しているという。違法売買される牙や角のほか、食用の肉を目的とした密猟、生息環境の破壊、更に人間の移住が原因だ。人口約4000万人のケニアには49の保護区があるし、国土の8%（約58万平方キロ）に及ぶという。しかし、どの保護区も、移動性動物の行動範囲を網羅しきれていない。そのため、動物と人間の摩擦が増えてきている。共同所有の土地を分割して個人の農場にしたり、多くのマサイ族が半遊牧生活をやめたことも圧力になっている。つまり、人口の増加と、保護区の減少であり、その傾向に有効な政策を持たない、あるいは、この状態を許す政府の姿勢に問題があるというのだ。更に、ここ数年、深刻な干ばつが、追い打ちを掛けている。

15年前にもあったといわれる大干ばつを上回る深刻さだ。2007年末の大統領選を引き金にした部族間の殺し合いが、2008年のケニアに混乱をもたらした。結果として、農作業の時期を失った為に、この旱魃は、人々の食料供給に打撃となった。食糧不足が、野生動物の保護区に人間の侵入を増やした。旱魃のために、水不足、草不足となり、野生動物の子どもが死ぬ、病気が蔓延するなど、個体数の激減を生じさせた。餓死するライオンやチーターが目につく。家畜を襲撃されたマサイ族が、ライオンを毒殺する事件まで起きている。この干ばつの背景にあるのは、地球の温暖化かもしれない。乾燥が、徐々に、表面化し、湖沼群の水位が下がり、水草が不足してきており、多くのカバが餓死し、残りも弱っているという。

NPO法人ワイルドライフは、野生動物のみせる野生ならではの美しさやしなやかさに魅了された。大自然と調和し、生きている姿に、人間社会、特に、都会に住む子どもたちや大人（保護者）たちが失ってしまったものを、野生動物の風貌の中に見いだした。孤高なまでの強さに感動し、多くの方々に見てもらいたいと思い、展示会運動を実施してきた。しかし、野生動物たちは、野生のままに、人間や自然の力で殺されているのだ。彼らの生存は、私達人間の生存条件の証でもあったはずだが、密猟者の高度な武器の前に、ただ理不尽に、屍をさらすほかない。干ばつの前に、やせ衰えて、骨と皮となって横たわる以

外にない。調整役であるべきケニア政府は、あまりに無力だ。日本政府を含む外部のドナーからの援助資金も有効ではないようだ。自然公園で、死に瀕している野生動物たちに、水や食料を与える力になっていない。密猟者たちの活動を防いだり、観光振興の為の道路作りにはなっても、乾燥する気候を食い止めることが出来ない。

この展示会の写真の動物たちは、今でも、生きているのだろうか？この雄々しいライオンたちは、今日も大自然の懷に抱かれて、悠々としているのだろうか？最近、写真家が、9枚の写真の掲載を求めてきた。その中に、「背の高い草陰から覗くオスのライオン」があった。雄々しいライオンの姿ではなく悲壮な表情と、必死さが浮かんだ目だ。写真家の解説も、「メスのライオンだけに任せていられなくなったオス ライオンが、自ら獲物を探している姿だ」とあった。そして、「大抵は失敗する」ともあった。飢えが、進んでいるのだ。そして、もう一枚は、「大きな空の下に、一列になって進むマサイ族とその牛たちの群れ」だ。「自然公園に草を求めて違法侵入」とあった。マサイ族も、水場や草場を求めているのだ。そして、チーターが、乾いた木の上に登り、必死に獲物を上から見つけようとしている姿だ。「カバの鬭争」があった。以前、「カバの愛情表現」の写真をはほえましく思ったが、今度の写真は、鬼気迫る死鬭だ。水草を奪い合っただけのことなのか、メスを争ったことなのか。かつてなく、カバたちの表情は、暗く、陰しい。同じ鬭争でも、「シマウマの鬭争」は、少し、ゆとりがある。カメラの気配で直ぐにやめてしまったらしい。そして、生まれて間もない「ハイエナの子ども」の写真が目についた。この写真は、母を失ったハイエナの子供かも知れないからだ。マサイ族の仕掛けた毒入りのエサの犠牲には、ライオンだけではなく、掃除屋といわれるハイエナも入っているという。

JICA横浜の展示会に、今日的な意義を見いだすとすれば、「しのびよる絶滅の危機」を訴えることだ。人間という魔王が、動物王国ケニアに人間の覇権を主張し始めている。野生動物の存在は、ケニアにとって観光という外貨獲得の手段であるが、マサイ族の生活を直接潤すわけではない。マサイ族から見れば、野生動物は、家畜を奪う、単に、敵にしかみえない。野生動物を保護しろといっても、彼らには、虚しいのだ。調整能力を発揮できない政府の無力の裏には、お定まりの腐敗があり、外部ドナーからの資金は、途中で奪われて、末端に十分に届かないと言われている。まして、目的であるはずの、野生動物保護や飢えていたり、乾いていたりしている野生動物の救済には、ほとんどなっていない。カバの餓死を知って、干し草を水辺に置いているという報道は、何を表しているのだろうか。野生動物に殺された家畜の補償金支給制度も機能し

ていないようだ。野生動物たちは、健気（けなげ）にすら生きていけない状況にある。私達の「ケニアの野生動物写真展」は、この実態を少しでも告発するお役に立ちたいと思っている。

野生動物に、それ自体の価値を認め、彼らの生息環境を無条件に保護しなければと思う。その政策は、金がかかり、合理性がないと批判されるかも知れないが、野生動物たちやその環境を失ってしまった後では、取り返しが付かないし、政治的にも、経済的にも、多大なコストを支払わなければならない。

野生動物は、ケニア政府だけのものでもないし、ケニアに住む人々だけのものでもない。野生動物は世界遺産なのであり、人類共通の宝であると言いたい。更に、人類と同じスパンの発祥の歴史を持ち、今日に至っている野生動物たちの生存を、人間が脅かし、絶滅の原因になる権利などないし、もし、かかる隣人を理不尽に扱うならば、その報いが必ず人類の未来に影を落とすに違いないと言いたい。彼らは、奇跡の星「地球号」の乗組員であり、船長である人類が、守らなければならない義務を負うものだからだ。

ある人は、「野生動物なんて、絶滅したっていいじゃない。自然淘汰なんだから！」といったが、その人は、絶滅させられる側の感情を理解できていないのだ。滅びる側、撃ち殺される側は、常に、人間ではなく、自然と野生動物の側だと思っているから言えるのだろう。そして、人間が、動物の一種であり、その生息条件を環境連鎖に依存している事実立つならば、自らを滅ぼすに等しい行動をとっていることを忘れていないにちがいない。

犬や猫を飼いながら、その目や仕草を見ていると、確かな生物の愛情や思いを訊くことが出来る。彼らの存在は、人間の生活に計り知れない潤いをもたらしている。そして、人間が必要な生息条件の一つに、野生動物の存在があるし、彼らの生息環境が人間の生息環境でもあると納得できる。そして、人間は、哺乳類という巨大なファミリーツリーの枝の中に、多くの野生動物たちの分布を見るとき、このメンバーは、人間と共通の幹から生まれ、発展したことを知る。

私達のNPOワイルドライフの活動は、「野生動物たちとその生息を保障する大自然を、いつまでも、この写真の美しさのままであってほしい」と願うことから始まっているし、それが運動の原点なのだ。そして、その目的のために、最善を尽くしたいと思っている。

(2010年4月29日)